

商家のくらしとモノ

な
5

奈良町モノ語り

調査から②

民俗通信

□267

清水 和彦



清水 和彦

▼奈良の近代史にも登場
奈良まちづくりセンター
が行つた「奈良町モノ語り」
調査から、「蘇つた軍医の
遺品」(勝野一執筆)に続
き、松山家(西新屋町)の
蔵の中のモノ(家財道具)
に焦点を合わせ、商家とし
ての暮らしを紹介する。

松山家の初代、正次郎の
ルーツは櫻本(いちらのものと
村(現天理市)で、実家は
醤油(しょうゆ)製造業を
営んでいた。正次郎は二男
だったため、明治初年ごろ
奈良で米屋を始め、「松山
商店」として発展。高畠町
にあつた陸軍歩兵第三十八
連隊にも納め、県内一と言
われた。

その名は、奈良の近代史
にも登場する。大正7(1
918)年夏、富山県から
米騒動が全国に広がり、奈
良でも8月14日夜、興福寺

調査した蔵は南棟(あ
り、主屋(おもや)から渡
り廊下(登録有形文化財))

伝いに行く内蔵の西に接
し、最近何十年かは、ほど

境内に千余人が集まつた。
群衆は、誰言つともなく
「松山方へ行つて廉売(れ
んばい)」の談判をしよう
と五十二段を駆け下り、松
山商店に押し寄せた。真つ

通り中国がルーツで、江戸時代に普及した。
箱型で中に羽根車を仕込み、腹巻した米や麦を上の枠(ます)から入れると、脚が4本あるふた付き
ハレやケのモノ

ハレの暮らしを物語るモノ
は華やかだ。婚礼などの
ノハラやかだ。婚礼などの
道具は多岐にわたり、ふだんの暮らしを伝える。詳

しくは奈良まちづくりセンターカーの論文集「地域創造」

55号の「松山家のくらしと
モノ」でご覧ください。

このほか大福帳などの文書が大量にあり、僅(わずか)に調べたモノの中には、旗約200本も見つかっ

た。出征兵士の送迎などに使われたものだろう。当時の世相を物語る証人だ。このほか大福帳などの文書が大量にあり、僅(わずか)に調べたモノの中には、旗約200本も見つかっ

た。

▼街 場の民俗学を付属の台所や水屋、かまど等のセットは、なべや釜(かま)、まな板や包丁(カマ)、手前の大口から排出され、離祭りで女の子の妻ヨネは戦時中、大日本国民会議(ほり)や日の丸の旗約200本も見つかっ

た。

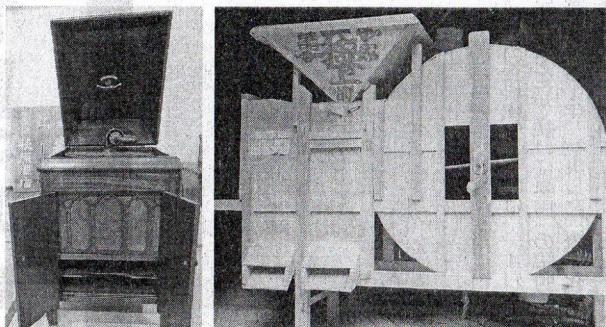
戦災免れ蔵に深く眠る

精米に使われた唐箕(まき)と
の四角い容器(うつわ)を並べて
置いた。お雛(ひな)と
お雛(ひな)と並んで、

の四角い容器で、黒漆(うるし)地に金
メッキの金具(きぐ)と垂絵(まき)と垂絵(まき)が豪華(きびしき)が豪華(きびしき)である。

▼テイチク製の蓄音器(じくおんき)と
テイチクの蓄音器(じくおんき)は、奈良
の「南木(なんぎ)」(櫻木正成)と
良ゆかりのモノとして見逃せない。テイチク(帝国蓄音器商社)は奈良創業で、かつては古賀政男、ディック・ミネ、藤山一郎らを擁する。雑(ざら)はお内(うち)裏(うわら)で、筆(たんす)と食(く)と、マークと帝國蓄音器の社名、「NANKO(南木)」

の道具類は、全て金時絵(きんじえ)の商品名があ



奈良にゆかりの深いティチク製の蓄音器

奈良の近代史にかかるモノ

事)

参考】井上清・渡部徹編『米騒動の研究』第2卷

△テイチク社史編纂委員会

「レコードと共に五十年」